

我が機は、米軍発表「ルイスビル大破」が、我々が生存しているから言えるが、後は、戦死のため未確認である。戦死したからと言いだないのが、この作戦であった。

〔編注〕

長沼武治氏の手記(三)は第Ⅺ巻に掲載されております。

戦時国難に殉じた

若者の青春譜

愛媛県 寺田幸男

私は大正十五(一九二六)年十一月、愛媛県西条市に生まれました。昭和十八(一九四三)年西条農学校を卒業し、予科練を志願して松山海軍航空隊に入隊、甲飛第十三期生として卒業しました。昭和十九年には徳島海軍航空隊に転属、訓練

開始、昭和二十年五月ころより同期の戦友や多くの先輩達の特別攻撃隊の出撃を見送りました。そして復員後は、亡き戦友の特攻戦没者慰霊行事などを執り行い、現在は、全国徳七会副会長(徳島空出身)、愛媛特攻戦没者奉賛会副会長、西条市青少年健全育成協議会会長、などをしています。ここに、その当時の殉国の勇士たちの武士道を語るとともに、当時の若者が捧げた愛国の青春譜を綴りたいと思います。

若者が捧げた愛国の青春譜

私は、十七歳になったばかりの時に松山海軍航空隊第一期生に入りました。

私の行った予科練、甲飛では、かなり叩かれ、かなり気合いを入れられております。予科練に入って還ってくるまでに三四〇〜三五〇発、尻つぺたを叩かれております。それは海軍に行った人はよく分かると思います。ちょうど今の野球のバットと同じような棒が当たっております。ここ

ろが腰が脱臼したり、骨が折れたりしますか、と云うと、人間は気分が入ったら、それはしないのです。十六〜十七歳の若者は、そういう訓練をしております。

私たち十六〜十七歳の若い者は四人死んでおるのです。それも神風特攻隊第一号、第二号、第三号辺りまでは、立派な実用機で、性能なりの飛行機に乗って飛んで行っているのです。私も後から入った兵隊にはそんな飛行機は回ってこないのです。練習機で行くのです。練習機で行くと言うことは、目的のところまで行くまでにグラマンにやられる。それでも行くのです。これには一理あるのです。

練習機であれば金属でなく、まず敵の電探に掛らないだろう。夜陰に乗じて超低空で行けば敵の電探に掛らないだろう。しかも薄明かりの時に行けと。明るい時に行くと言われてしまうから、だから朝の三時、四時ころに行けと。払暁攻撃です。何ほ練習機に爆弾を積んで行くのだろうか、

それが効果あるのだろうか、それは皆さんには分からないんですね。

航空母艦という軍艦は、練習機でもいいんですよ。爆弾が一つ当たったら、その軍艦というものは裸でなく弾薬を格納しているのです。それに一発当たればいいんです。大きな軍艦に当たって爆弾一つでポインポインと沈めるのではないのです。だからこの作戦は間違いではない。ただちよっと飛行機の性能が落ちるから無惨なのです。ですから当時海軍軍令部の方針は間違いではないと私は未だに信じております。

戦果は上がらなかったにしても、最終的には特攻隊の攻撃としては、やはり練習機で行く場合もあり得るだろうという風に思っております。

狙うのは航空母艦、戦艦の煙突です。煙突の下に機関室があります。これをまず狙え、それを少しでも痛めたら軍艦は走れんようになります。そうなってくると、その軍艦は役に立たなくなります。それで狙ったのは全部煙突の下でした。中に

は軍艦の頭や尻尾に当たって悲惨な死に方をしていますけれども、そういう作戦でございました。

西条市では、関中佐が特攻に出ております。大町小学校、西条中学出身であります。昭和十九年十月二十四日に部下と共に五人は神風特攻隊の魁さきがけとして敵艦に突入し戦果を上げております。それで私どもも元海軍軍人の有志が集まった海軍会というのを作っております。その中に毎月一回、酒を飲んだり軍歌を歌ったりして昔の海軍生活懐かしがっていたのでありますが、お酒を飲んで騒ぐだけでは駄目だろう。

よく考えてみると関中佐が西条市から出ているではないか、しかもそれに対する慰霊も何もないし、関中佐の家は関中佐が戦死してお家は断絶しております。そういうことではいかんと皆で慰霊をしようではないかと建てたのが、今檜本神社内にある「関中佐慰霊の碑」であります。

そしてその関中佐だけではいくまいかと、部下

も一緒に死んでいるということで、五人を合祀しまして「五軍神奉賛会」というのを作りました。それで現在は、この五人だけではないんだ、愛媛県下でも相当の数の方が亡くなっているだろうというところで、私も調査させて貰いました。結果、神風特攻隊として亡くなった方は七十九人おられました。当然その中には陸軍の方も十八人入っております。

そういうことで、その方たちの慰霊を、十月二十五日、ちょうど神風特攻隊がアメリカの航空母艦「セントロー」などに突入し撃沈した時間に合わせまして、毎年慰霊祭を行っています。

太平洋戦争を想う

それから戦争に負けた原因は、これは皆さんもご存知ですが、ミッドウェー海戦なんですね。これはなぜ負けたか、という前に、今の同和教育じゃないけれども差別があったのです。海軍作戦本部でいろいろの作戦をする時に、作戦に携わる

のは海軍兵学校を出ていなければならん。何ぼ実戦で経験が深くても、作戦の実戦を知っておつても「お前たち成り上がりは向こうへ寄つておれ」と言う形で作戦会議が完全でなくなった。これはアメリカが賢かつた。ハワイ、マレー沖で、あの巨砲を持つ大艦が飛行機にやられた。それでアメリカはすぐに切り替えた。海軍作戦の主体は飛行機だ、と言うことで上層部も航空幹部を交せてやり替えた。日本はそれをやつていない。まあまあ戦果が上がり、上手くやつているし、このままでいいか、と。

ミッドウェー海戦で参謀は航空参謀だと良かった。飛行機が艦をやつつけるから艦が沈むのです。そして、その艦に積んである飛行機も弾薬も沈んでしまうのです。こういうことも分からんと、大艦巨砲主義の参謀が、砲術関係の偉い人がトップになつてゐる。航空参謀の方から「今行くべきだ」と言うても「ちよつと待て」と止めてゐるのです。

このために時間がもの二〇分ぐらいの間に、日本の航空母艦四隻がバタバタやられた。それでも日本の連合艦隊の航空隊は慌てんでもいいのにミッドウェーの島を、島は逃げへんのですよ、逃げるのは艦隊なのです。艦隊をやつつけねばいかんのに、艦隊が分からんと言うので島の飛行場をやつつけて置けと言う。ところが飛行場はもぬけの殻です。ちゃんと敵は情報を知つてゐるから全部空中に退避してゐる。

それで戦果が上がらぬから第二次攻撃隊を発進せよとの連絡があつたから、引き返して、段取りしておつたその時に、参謀は「ちよつと待て、慌てるな。一応戻つてくるから、還つて来た飛行機を下ろしてからお前ら出る」といつて弾薬、魚雷をいっばい装備した飛行機を待たせておつたのです。

その間に敵の航空機は四〇〇五〇機もいつべんに来てバタバタやつたものだから、もう母艦の上には積んでゐる飛行機は一遍に破裂して、しまいに

は四隻の空母のうち三隻まで沈没してしまつたのです。残つた「飛龍」が一隻で命からがら戦つたのです。

そういうことです。上層部がマルネリ化して、しかも差別をしていたのが大きな原因となつておりました。その時の古参の隊員とか、長い間掛かつて武勲を立てた生き残りの隊員たちは、本当に腹を立てております。

軍艦が沈んだということは、どういうことかと申しますと、軍艦には飛行機の搭乗員が二百も三百人もいるのです。優秀な搭乗員が。それらが艦と一緒に沈んでしまう。軍艦がやられたといつても、軍艦だけが沈んだだけじゃないんです。飛行機もその搭乗員も、飛行時間が千時間以上のパイロットなども積んでいゝんです。それがそういう作戦が採られたために全部やられて海の中に沈んで死んでいるのです。航空兵が海の中に沈むことほど情けないことはないのです。

そういうことでやられたものだから、陸軍の方

が、ミッドウェーというのは、ここでアメリカをやつつける作戦だと思つていたのですが、実際にやられたものだから、その陸軍が慌てた。ガダルカナルなどだんだん火が付いていった訳です。

負けた原因には、まあいろいろ問題がありますけれども、日本が戦争に一番大きなのは、今の考え方、日本人の考え方、昔の悪い伝統などが災いしたことを戦記として坂井三郎さん（撃墜王）が書いております。そして日本人のパイロットは世界で一番です。それには撃墜王が沢山おります。

それで関中佐が行つた時には、西沢広義という戦闘機パイロットが直衛護衛として出ております。この方などは世界で一番の撃墜王ですね。この人が直衛で行つていゝものだから、確かに神風特攻隊の戦果を見届けて還つて報告しております。だから後から考えた戦果ではなくて実際に見届けた戦果です。この西沢さんも、この五軍神の戦果を見届けて報告したあとで、どこかへ用事があつて行かれねばならない時に、零戦で行けばよ

いのにダグラスの輸送機に乗って行ったのがグラマンにやられてしまった。非常に優秀なパイロットがちよつとしたことで無惨にも亡くなっております。

戦争の中でも作戦の下手際、そういうようなものが非常に多くなっていました。それで予科練は昭和十二年に甲飛生ができましたけれども、第二期生までの八五%ぐらいは亡くなっております。生き残っているのはほんの僅かです。それで結局、当時の若者がどうして志願をして神風特攻隊に行ったのか、私たちも当時の若者ですけれども、これにはやっぱり自分では分からなかったけれども、日本人には武士道というものがあり、確かに体の中に残っている。だからそれにもって教育が「教育勅語」を中心に、私たちは勉強しました。

最後に五軍神の遺書を読ませて頂きます。

第一番機 関 行男中佐

『西条の母上には幼児より御苦勞ばかりおかけいたし、不孝の段、お許し下さいませ。』

今回帝国勝敗の岐路に立ち、身を以て君恩に奉ずる覚悟です。武人の本懐此れに過ぐることありません。

鎌倉の御両親に於かれましては、本当に心から可愛がっていただき、その御恩に報ゆる事もできず征くことを、お許し下さいませ。

本日、帝国の為、身を以て敵艦に体当たりを行い、君恩に報ずる覚悟です。皆さまお体大切に。

教え子は 散れ山桜 此の如くに』

第二番機 中野盤雄少尉

『お父さん、お母さん。私は天皇陛下下の赤子として、お父さんお母さんの子として、立派に死んで行きます。喜んで参ります。ではお体を大切にお暮し下さい。さようなら』

第三番機 谷 鴨夫少尉

『はじめありて 終わりあるも鮮し—中 略—』

日本の 空征くものの 心なれ

散るを 惜しまぬ 桜花こそ』

第四番機 永峰 肇飛行兵曹長

『南溟に たとひこの身は 果つるとも

いくとせ後の 春をおもえば』

【解 説】

〔海軍少年航空兵の養成〕

予備練制度の創設 昭和五年 第一期生

応募者 五、八〇七人 選抜 七九人

制度改正 昭和十二年

甲種飛行予科練習生

（搭乗員の養成尉官補充） 十六—十八歳

乙種飛行予科練習生

（従来の制度 八期生以降）十四—十六歳

丙種飛行予科練習生

（一般兵科より採用・激戦参加最多）

〔甲種飛行予科練習生入隊〕

松山海軍航空隊は、昭和十八年に開隊、甲飛十三期は松空の第一期生となり、当時十六歳の少年であった私は海軍航空隊に入隊した。朝の「総員起こし」から「課業はじめ」「食事」「巡検」など、全てラップで始まり、特に「巡検ラップ」は世界の名曲である。

〔飛行予科練習生訓練〕

航空隊の隣接地に松山航空基地があり、零戦用の実用機教程訓練中の先輩、甲飛第十期生の「豹部隊」が毎日猛訓練を続けていた。

後にその先輩たちは第三四三海軍航空隊「紫電改」戦闘機隊として呉軍港防空の任に就き活躍した。また特攻第一号の敷島隊二・三番機、中野少尉・谷少尉の先輩勇士たちが、小生たちの上での飛行作業は七十数年後の今も脳裏に焼き付いて思

い浮かべます。当然このような環境に恵まれ飛行予科練習生教育には大いに励ましとなった。

実に小生たち同期は二七、九七七人入隊し、飛行練習生として松山空を巣立ち、徳島航空隊に転勤した。軍人精神教育は充分できていても、乗る飛行機や燃料不足で各所で無念の思いを何度したものか、厳寒の中、旋回機銃の実弾演習、弾薬装填、三発連射、曳光弾確認等で、必ず後での説教は総員の制裁、いつものバッテリー罰直があった。その日は小雪混じりで、積雪五センチ位あった。

その上に素手の腕立て伏せをさせられた。当然冷たさで手がしびれる状態の筈が、全身より汗が滲み出て戦闘帽の先よりポタポタと汗が落ち、顔の下の雪が解けはじめ、精神力の偉大さを実感した。体操では空中転回、水泳では四メートルの飛込台よりのダイビング、短艇競争では皆、尻の皮がむけて初めて一人前となる。

教育は専門学校程度の幾何、数学に通信、整備、爆撃、機雷、射撃、特に必要な航法は、しつ

かり勉強しないと、広い太平洋上で基地へ帰投できず、不時着を覚悟しなければならない。風や雪による視界不良で、青一面の海原ばかりの飛行は決して楽なものではない。

また航空兵には空より見た艦隊、敵の飛行機、地上の基地設備など味方の軍備知識を熟知していないと、敵状偵察の報告ができない。いずれにしても役に立たない、軍隊字引の技術が必要視される。

〔航空戦闘〕

甲飛第十三期は二年足らず、短期間の搭乗員訓練を強いられて、詰め込み主義の教育と訓練で、心身共に精神力で頑張らないと我国の国難を打破することはできないと、がむしゃらに攻撃精神を養って来たが、残念ながら先輩の後継者として充分力を出し切れなかった。全く空しい思いだけが駆け巡る。

〔甲飛先輩の足跡〕

第一期生 昭和十三年九月に二五〇人入隊。昭

和二十年七月に第十六期生一〇次分、二五、

二三六人入隊、僅か九年間に戦闘を繰り返

し、十期生までは四、二七一人中、七〇%の

三、〇二〇人の戦死者を数える。

甲飛第十四期〜甲飛第十六期は、特攻艇、特殊
潜航艇及び陸戦隊として攻撃精神を発露した。い
づれにしても、我が祖国のため、多くの武勲や活
躍を歴史の数ページに残し、若者の命と引き換え
に大和民族の誇りを全うした。